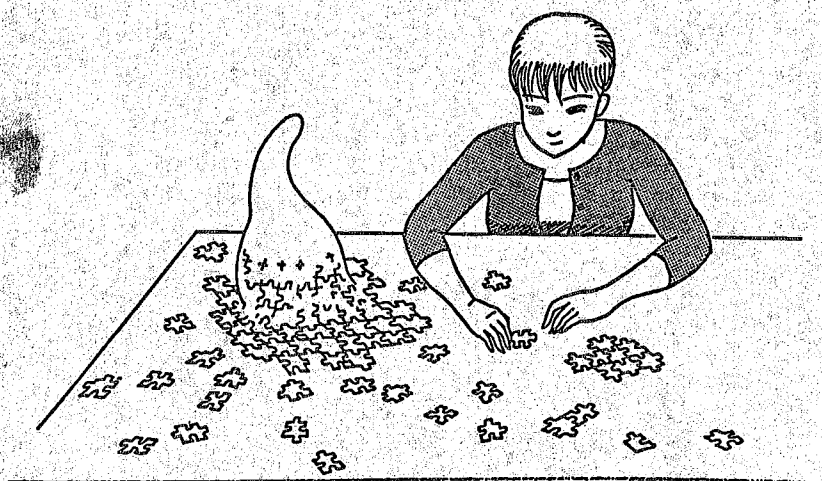


INFORMATION *Circular*

JAPANESE SOCIETY OF DEVELOPMENTAL BIOLOGISTS

■第46回運営委員会報告.....	1
■決算報告および暫定予算案について.....	3
■新刊紹介.....	6
■お知らせ.....	9
■シンポジウムのお知らせ.....	10
■研究助成金公募のお知らせ.....	12
■日本学会会議だより.....	16
■会員移動.....	20
■賛助会員.....	22
■広告掲載・賛助会員入会のお願い.....	23



NO. 71

APRIL 1992

日本発生生物学会

〒113 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学 理学部 動物学教室

会 長：〒 444 愛知県岡崎市明大寺町字西郷中44
 基礎生物学研究所 発生生物学系 形態形成部門
 江口吾朗（電話 0564-55-7570）

DGD編集主幹：〒 060 札幌市北区北10条西8丁目
 北海道大学理学部動物学教室
 片桐千明（電話 011-716-2111 内線 5298）

DGD編集幹事：〒 724 東広島市鏡山1-3-1
 広島大学遺伝情報
 嶋田 拓（電話 0824-22-7111 内線 2824）

事務局：〒 113 東京都文京区本郷7-3-1
 東京大学理学部動物学教室
 （幹事長） 塩川光一郎（電話 03-3812-2111 内線 4431）
 （庶務幹事） 田代 康介（電話 03-3812-2111 内線 4433）
 （会計幹事） 浅野 美咲（電話 03-3812-2111 内線 4432）

学会センター：〒 113 東京都文京区本駒込5-16-9
 学会センター C21
 財団法人 学会事務センター
 日本発生生物学会担当係（電話 03-5814-5810）

日本発生生物学会への入退会、住所・所属変更、会費納入、および出版物（DGD、イン
 フォメーション・サーキュラーなど）の郵送については、上記の日本学会事務センターに書
 面でお問い合わせ下さい。

第46回運営委員会報告

第46回運営委員会は、1992年1月25日午後1時より、学士会館分館において開催された。

出席者（敬称略）：江口吾朗（会長）、浅島 誠、天野 實、片桐千明（兼編集主幹）、塩川光一郎（兼幹事長）、嶋田 拓（兼編集幹事）、中辻憲夫、長浜嘉孝、東中川徹、安増郁夫、山上健次郎、米田満樹（以上運営委員）、田代康介（庶務幹事）、浅野美咲（会計幹事）

1. 会長挨拶

2. 庶務報告

1) 1992年1月1日現在の会員数は915名であり、この1年間に47名増加した。

正 会 員：769名（+34名）

学生会員：146名（+13名）

（賛助会員：13団体（－1団体）

2) サーキュラー69号と70号を発行した。

3) 東レ科学振興会の研究助成への応募は1名であったので、学会としてその1名（広島大学理学部、峰雪芳信氏）を推薦した。

4) ブレインサイエンス振興財団の研究助成への応募は1名であったので、学会としてその1名（愛知県発達障害研究所、渡部眞三氏）を推薦した。

5) 成茂基金による海外出張（第9回後期募集、20万円、1名）については、1名の応募があり、審査の結果その1名（東京大学理学部、田代康介氏）に贈呈することにした。

3. 会計報告

1991年度決算報告及び1992年度暫定予算案が提出され、審議の結果了承された。

4. 会計監査委員選出

田沢栄五郎（横浜市立大学文理学部）、藤原晴彦（東京大学理学部）の両氏に依頼することが決定した。

5. DGD編集委員会報告

1) 投稿数は増加しており、順調に出版されている。特に海外から内容のある論文の投稿が増加しつつある。採択から出版までの期間は、3～5箇月である。

2) 第34巻（1992年版）から、別刷代を約40%値上げし、無料提供部数を50部とした。

3) 雑誌のサイズ（縦）を他の欧文雑誌のサイズに合わせることにした（短くする）。

6. 学術会議報告

平成5年度から科学研究費において複合領域内に発生生物学が新設されることとなった。

7. 選挙管理委員の選出

大日方昂（千葉大、理）、野川宏幸（千葉大、教養生物）及び深町博史（東大、理）の3氏依頼することを決定した。

8. 1992年度大会準備報告

5月28～30日の開催に向けて順調に準備されている旨、報告された。

9. 1993年度大会開催地について

山名清隆（九州大学，理学部）氏にお世話を依頼することを決定した。

10. その他

学会の会計事情の関連により，会員数を増やす努力をすることなどが話し合われた。また，DGDを今後どのように取り扱っていくかを討議し，当面DGD基金を募り，当学会全体としての経済状況を改善することを確認した。これらに關係してDGD別刷の無料提供（現行50部）を近いうちに（時期については編集委員に一任）廃止することとした。

1991年度決算報告書（一般会計）

収 入	金 額	支 出	金 額
学会費	8,672,554	DGD印刷費	11,391,800
DGD売上	3,327,000	DGD編集費	2,100,000
英文校閲料	250,000	英文校閲費	500,000
バックナンバー	98,700	学会事務センター	
文部省助成金	4,790,000	業務委託費	1,079,805
広告代	523,794	発送費	890,664
賛助会費	350,000	諸経費	227,071
雑収入	25,248	DGD保管料	93,600
利息	73,570	大学印刷	
特別会計より	1,500,000	発送費	797,420
		別刷代	684,641
		サーキュラー印刷費	395,520
		要旨集印刷費	750,000
		大会援助費	250,000
		運営委員会経費	278,589
		事務局経費	168,334
		送金手数料	4,017
小計	19,664,806	小計	19,611,461
前受会費	53,940	前受会費	53,940
前年度繰越金	104,617	次年度繰越金	104,022
合 計	19,769,423	合 計	19,769,423

1991年度決算報告書（特別会計）

収 入	金 額	支 出	金 額
寄付（成茂基金）	500,000	旅費援助	300,000
DGD基金	765,923	送金手数料	1,236
テレホンカード売上	20,000	一般会計に貸出	1,500,000
小計	1,285,923	小計	1,801,236
前年度繰越金	3,288,646	次年度繰越金	2,773,333
テレホンカード在庫分	312,000	テレホンカード在庫分	312,000
合 計	4,886,569	合 計	4,886,569

1992年度暫定予算案（一般会計）

収 入	金 額	支 出	金 額
学会費	8,660,000	DGD印刷費	11,400,000
DGD売上	3,668,500	DGD編集費	2,100,000
英文校閲料	250,000	英文校閲費	500,000
バックナンバー	50,000	学会事務センター	
超過ページ代	100,000	業務委託費	1,150,000
文部省助成金	4,800,000	発送費	950,000
広告代	700,000	諸経費	240,000
賛助会費	350,000	DGD保管料	110,000
雑収入	30,000	大学印刷	
利息	75,000	発送費	840,000
		別刷代	480,000
		サーキュラー印刷費	810,000
		要旨集印刷費	790,000
		大会援助費	250,000
		運営委員会経費	300,000
		事務局経費	200,000
		送金手数料	5,000
		選挙費用	400,000
特別会計より	2,000,000		
小計	20,623,500	小計	20,525,000
前年度繰越金	104,022	次年度繰越金	202,522
合 計	20,727,522	合 計	20,727,522

1992年度暫定予算案（特別会計）

収 入	金 額	支 出	金 額
DGD基金	1,500,000	旅費援助	200,000
		送金手数料	1,000
		一般会計に貸出	2,000,000
小計	1,500,000	小計	2,201,000
前年度繰越金	2,773,333	次年度繰越金	2,072,333
テレホンカード在庫代	312,000	テレホンカード在庫分	312,000
合 計	4,585,333	合 計	4,585,333

1991年度決算報告

<一般会計の部>

1990年度に比べて収入全体は増加しています。この中で減収となったのは超過ページ代、広告代、雑収入です。このうち広告代については1991年度内に未納の会社があり、これらは1992年度に徴収する予定です。支出については全体としては減少しているようにみえますが、インフォメーションサーキュラー印刷費が一号分(Na.69)未納ですので、実質的に大きな増減はありません。支出を抑える原因となったのは、諸経費(学会事務センター、事務局)、大学印刷発送費(DGD)です。一方、その他の必要経費は増加傾向にあり、項目としては、学会事務センター業務委託費、発送費、DGD保管料、大学印刷別刷り代です。以上の結果、1991年度は145万円の赤字となり、その赤字分を特別会計からの150万円の借り入れというかたちで処理しています。

<特別会計の部>

DGD基金は76万円と予定額には達しませんでした。しかし、これは寄付の件数が減少したのではなく、20万円を越す大口の寄付がほとんどなかったためです。また、第24回大会より34万円の寄付を頂きました。支出としては成茂基金50万円のうち30万円を国際学会参加者の旅費援助に宛て、残りは1992年度に繰り越しました。また、150万円を一般会計への貸出としました。

1992年度予算案

<一般会計の部>

1991年度に比べて支出増が予想されるのはセンター業務委託費の値上げ、サーキュラー印刷費(Na.69未納分を加算)、選挙費用です。更に、各項目の支出は物価の上昇などのため5%程度増加すると思われます。一方、減少が予想される項目としては、DGD別刷り代の学会負担が軽減されます。このため、全体としては1991年度より75万円程度の増加にとどまると予想しています。一方、収入は、DGDの売上、超過ページ代の増加により45万円程度増加すると考えています。広告代、賛助会費については、不況のおりから解約の申し出が予想され、現状のままで1991年度未納分の徴収と打ち消す程度が限度と予想しています。

以上のことから、1992年度は更に財政が厳しくなると考えられ、赤字額は約175万円になると予想しています。この赤字分は特別会計からの借り入れによって処理する予定です。

<特別会計の部>

DGD基金としては150万円の収入を期待しています。1991年度の成茂基金の繰越金20万円は旅費援助として支出する予定です。また、一般会計の赤字分として200万円を貸し出す予定です。

新刊紹介

Transdifferentiation Flexibility in cell differentiation.

T. S. Okada 著 Clarendon Press, Oxford (1991)

日本発生生物学会、および国際発生生物学会の会長を歴任され、生物学のノーベル賞ともいわれているハリソン賞を受賞された、京都大学名誉教授・元基礎生物学研究所所長岡田節人博士の永年の研究の集大成として、1991年10月にオックスフォード大学出版局より出版された。29枚の写真と17枚の図版を含む248ページの本で、本体定価は16,200円。細胞分化の flexibility (柔軟性) という副題をもった“分化転換”という題の本書は、この問題に関するまさに当事者自身による決定的な本であるといえよう。

現代の発生生物学は“発生生物学が復活した”ということばで表わされるように、またある分野、たとえば胚誘導などの分野では、今がその“ルネッサンス”であるといわれるように、活潑な研究の発展の時を迎えている。しかし、それにも拘らず、そのような発展の波は発生生物学の他の領域には、まだ充分には及んでいないきらいがある。本書の著者は、一方でそのようなことを認めながら他方でそうした研究分野が今後の大発展の可能性を秘めていることを述べる。そして、本書で扱う「分化と形態形成における柔軟性」すなわち、「分化転換」がまさにこれから発展すべき重要な分野の一つであると位置づけている。

ところで、実際の分化のあり方をみると、それはいささかとまどいを起こさせるところがある。分化した状態というものは安定なようにみえるが、しかし別な局面では不安定なようにもみえる。この本で取り扱われている分化転換の起こる時にそのように感じられる、というのである。そして、著者はこの一見矛盾したようにもみえる分化転換の現象が、実はここ数十年の間にあまり注意を払われていない、と述べている。特に、再生現象や成体組織中に思わざる異なる組織が出現する現象がほとんど一世紀も前に見出されているにも拘らず、いわゆる分化転換現象が種々の実験系で広くみられるようになったのは比較的最近である。そこで、本著者は、ここにそれらをまとめて収録しその生物学的意義を問おうとしているのである。

さて、以上のことを頭に置いて本書の目次をみると、実際、分化転換に関する古典から現代に至る内容がほとんど網羅されているのがわかる。まず第1章のイントロダクションでは本書の目的と問題の範囲が Zwilling (1963) のヒドラの分化の古典の引用から説き起こされる。分化は不可逆的過程ではなくそこではひとつの細胞タイプから他の細胞タイプへの切り換えが実際に起こること、従って分化した状態が柔軟性をもったものであるということから考えがスタートされている。この部分は、分化転換の研究が以前にあった一つの悲観的見方、すなわち、分化の転換はもしあったとしても、それは“例外”または“アーティファクト”と呼ばれるべきもので、細胞分化の理解へとそれによって向うことのできるものではない、という考えとのひとつの闘いであ

ったかも知れないことを考えさせる。あるいはそれは細胞系譜の設定のプロセスという発生現象の見方との一致点を見出すための努力の連続であったようにもみえる。従って、本書では古くから人々の頭に去来したいいくつもの問題点を整理し、分化転換の現象を発生学の一般的概念とうまくマッチさせ、細胞分化という“General-narrowing process”のなかにおけるその正当な意味づけを目指しているのである。

以上のような考えから、第2章では、分化した細胞の中で休んでいるようにみえる遺伝子は活性化され得るのかという命題が取り挙げられている。ここでは、核移植、核の融合、脱メチル化、植物細胞の場合の分化、ショウジョウバエの成虫原基にみられる決定の転換などについて述べられる。そして、分化した細胞中の不活性にみえる遺伝子が実は活性化を受け得るものであると明記されている。こうして、ここではこの後に展開される分化転換現象の全体像の理解に至る理論的な環境づくりがなされている。そして、第3章では、第2章でみられた遺伝子活性の変化が正常な発生過程でもみられるかどうかを問い、そのような研究に特異的な蛋白質マーカーの導入を行なった例を挙げ、解説している。そして、分化の正常な導筋においても一つの分化マーカーの発現から他の分化マーカーの発現へと変化が起こりうるものであることを一般的なかたちで述べている。

第4章では単一の細胞集団、あるいはその関連した細胞のあいだでみられる分化転換の例が述べられている。まずニューロンの表現型の転換の例が紹介され、次に色素胞の分化転換に話題が移される。そして、内分泌細胞やクロム親和細胞からのニューロンへの分化転換およびそれらに影響を与える外的要因の分析がなされている。そして、第5章では古典的な意味でのメタブラジア（化皮）とそれに関連した現象の再評価がなされ、次の第6章では、いわゆる再生現象における分化転換の例がとり挙げられる。医学的分野でみられる分化転換の多くの例（第5章）と動物学分野でみられてきた再生現象における分化転換（第6章）が多く示されていることから、この第5および第6章は、いわばこの本の議論のデータベースに当たるものとも考えよう。

第6章では、上述のように、プラナリアの再生や両生類の肢の再生の現象が論じられているが、その部分の次には、レンズの再生現象が述べられている。そこでは、虹彩からレンズへの再生現象の研究が100年以上の長さにわたって続けられていることが示されている。そして、このウォルフの再生と呼ばれてきた再生現象がやはり分化転換研究の中心的なものであったことが明らかにされ、その研究から江口博士と本著者の共同研究による新しい世界の開拓のありさまが生き生きと述べられている。そして、神経網膜からのレンズへの分化転換が詳しく述べられ、次いでその分析系としての培養系の導入について第7章を当てている。そして、ここに至って、分化転換の研究が α -クリスタリン遺伝子プロモーターに連結したCAT遺伝子などを駆使する、分子生物学として開花してゆくありさまが生き生きと述べられている。そのなかで、近年になって現われた分化転換のもう一つのめざましい系であるクラゲの横紋筋のコラーゲン処理後の分化転換の例も詳細に解説されている。

第8章では、それまで述べてきた分化転換の多くの例を踏まえて、分化転換に影響を与える因子の分析が行なわれている。そのような因子はおよそ6つあり、第1は分裂周期あるいは分裂回数の問題、すなわち、分化転換には、新しいDNA合成が必要であるかという問題、第2は分化転換の前の表現型の消失に関する問題で、異なる細胞タイプに特異的な表現型を同時に1つの細胞が表わしうるのかという問題、第3は分化転換の引き金となる仕掛けがどのようなものかということ、第4には、接触により形成されている細胞間相互の作用を破壊した時にそれが表現型の変更を引き起こすかという問題、第5には、以上に述べてきた分化転換を特異的な分子が引き起こすか、そして第6には、そのような分子の変化のすり込みがどの程度に分化転換を支配するかが論じてある。

そして最後の第9章においては、分化転換の特徴を3つの点にしぼって総括している。まず第1は、分化転換が基本的には、一方向性のものであって、逆の方向はあまり起こらないものであること、第2は、分化転換がコインに両面があるように、他方では、生物学的な損傷の修復であるとなせる点が指摘されている。

そして第3には、分化転換の機構の仮説的なまとめが与えられている。そこでは、まず、正常な細胞間相互作用が破壊されたのちのしかるべき因子の放出が考えられている。その因子は少なくとも2つあり、1つは失われたものを回復しようとするものであり、他は、もとの細胞の表現型を失なわせるように作用し、新しい細胞タイプの発現へ向うものである。こうして、現代発生生物学の1つの柱ともいえる細胞系譜の問題と分化転換の現象とが統一的に考えることのできるものである、という考え方が次第にはっきりと現われてくる。

以上、簡単に内容紹介を行なったわけであるが、本書は大変読み易くわかり易い、そして、行間に、あの特徴のある、めがねの本著者の表情が顔を出し、熱心に語りかけてくるように思われる。本書は若い人にもベテランの研究者にも、また理学関係の人にも医学・農学関係の人にも、広く読まれうる好書であると思われる。

東京大学・理学部・動物学教室・分子発生学研究室

塩 川 光一郎

お知らせ

＜ISD (International Society for Differentiation) 大会のお知らせ＞

前号にも掲載致しましたが、フィンランドのヘルシンキにおいて第7回ISD大会が開催されます(P.10～11)。奮って御参加下さい。

また、第8回大会は、1994年に広島(世話人、田原(広島大・医・病理))で開催されます。詳細が決定しましたらサーキュラーでお知らせいたしますので御注意下さい。

＜岡田節人氏 International Union of Biological Science 副会長就任のお知らせ＞

岡田節人先生が、International Union of Biological Science の副会長に就任されました。今後の先生の御活躍を祈っております。

＜学会への寄付について＞

成茂科学技術研究所社長の成茂栄一氏より多額の御寄付を頂きました。これまでも海外渡航旅費など学会への援助として寄付をいただいてまいりました。紙面を借りて感謝いたしたいと思えます。

＜DGD基金について＞

前号のサーキュラー発行時より現在までに、以下の会員の方々からDGD基金に御寄付を頂きました。厚くお礼申し上げますとともに、お名前をここに記して感謝致します。

学会の財政は窮状を脱していない状態が続いています。どうか引き続きDGD基金に御寄付頂きますよう、よろしくお願いいたします(巻末の振替用紙を御活用下さい)。

記

DGD基金御寄付者氏名(アイウエオ順、敬称略)

片桐千明, 若原正己

＜事務局より＞

1. 研究助成の応募について

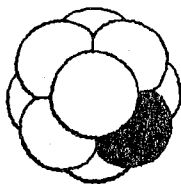
研究助成の公募を掲載しておりますが、学会推薦が必要なものについては各助成金の期日の約一箇月前を締め切りとしていますので御注意下さい。なお、今号掲載の東レ科学技術振興財団の募集につきましては、8月31日とさせていただきます。

2. 所属、住所の変更届について

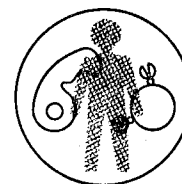
今年度は、会長及び運営委員の選挙が実施されます。これに伴い会員名簿を作製しますので所属、住所などを変更された方は、近日中に変更手続きを行って下さい。手続きは、書面にて日本学会事務センターお知らせ下さい。

3. 住所不明者

下記の方々の住所が不明となっています。御存知の方は、事務局までお知らせください。
楠慎一郎, 笹川慎一, 鈴木通世, 竹田 晃, 波磨忠雄, 深山昭一, 小出水圭子(敬称略)



The Seventh International Conference
of
The International Society for Differentiation



CELLULAR PROGRAMMES FOR GROWTH, DIFFERENTIATION, AND NEOPLASIA

19-23 July 1992

Helsinki, Finland

First Circular

First Circular

THE INTERNATIONAL SOCIETY FOR DIFFERENTIATION

The objective of the ISD is to promote research into all aspects of animal and plant differentiation, with particular emphasis on the relationships between developmental biology and oncology. The Society's journal *Differentiation* and its international conferences serve to promote interdisciplinary and international communication among persons interested in these subjects.

SCIENTIFIC PROGRAMME OF THE CONFERENCE

The Conference will focus on timely topics in cell growth, differentiation, and neoplasia. The final programme will be drawn up by the International Scientific Committee and will be composed of lectures, half-day symposia, mini-symposia, and poster sessions.

Tentative topics for the programme include:

- Growth factors, signal transduction, second messengers
- Cytoskeleton, cell adhesion
- Cell-matrix interactions, pericellular proteolysis
- Early embryos, cell lineages
- Embryonic stem cells, embryonal carcinoma cells
- Embryonic induction
- Cytodifferentiation, morphogenesis, pattern formation
- Neuronal development, angiogenesis, haematopoiesis
- Differentiation of normal and malignant epithelial cells
- The effect of the microenvironment on differentiation
- Differentiation therapy of cancer
- Cancer genes, tumour suppressor genes
- Gene therapy
- Cell migration and metastasis
- Stress response and apoptosis

HOST ORGANISING COMMITTEE

E. Lehtonen, Chairman, L. Saxen, Head of Scientific Committee

K. Alitalo, L.C. Andersson, M. Jalkanen, E. Saksela, H. Sariola,
I. Thesleff, K. Tryggvason, A. Vaheri, I. Virtanen, J. Wartiovaara

INTERNATIONAL SCIENTIFIC COMMITTEE

The International Scientific Committee will be announced in the Second Circular.

SECRETARIAT

The Conference Secretariat will be pleased to provide any information required. Please address all correspondence to:

ISD-92
Ms. Terttu Seppänen
AREA Travel Agency Ltd
University of Helsinki
P.O. Box 227
SF-00131 Helsinki, Finland

Tel: Int + (358-0-) 1855382
Fax: Int + (358-0-) 1855379

GENERAL INFORMATION

Location

The Conference will be held at the Porthania Building, University of Helsinki, in the centre of Helsinki.

Dates

19-23 July 1992

Language

The official language of the Conference will be English.

Abstracts

The abstracts of the papers and posters will be published in a volume of Conference Abstracts. The call for abstracts will appear in the second circular, to be published in the Autumn of 1991.

Climate

The weather in July is usually pleasantly warm and bright, with 20 hours of daylight in Helsinki.

Special Events and Tours

A diverse programme of social events will be offered to the participants. Many interesting cultural events will occur in Finland at the time of the Conference. Special activities will be available for booking by participants. These will include tours of the countryside with its natural forests and unspoiled lakes and visits to Lapland in the north and to Leningrad in the USSR.

To receive the Second Announcement and future information, please complete and return the following form:



The Seventh International Conference of the International Society for Differentiation:
"CELLULAR PROGRAMMES FOR GROWTH, DIFFERENTIATION, AND NEOPLASIA"
19-23 July 1992 Helsinki, Finland

Name Affiliation
Address
..... Country
Telephone Telefax

Please return to: ISD-92, Ms. Terttu Seppänen, AREA Travel Agency Ltd, P.O.Box 227, SF-00131 Helsinki, Finland,

公益信託・成茂動物科学振興基金

平成4年度研究助成

1. 助成の対象 基礎的な動物科学の研究。
2. 助成の内容 上記研究に対し、助成金を交付する。
助成金額：約600万円。
1件につき100万円程度までとする。助成金は、備品、消耗品、謝金、国内旅費などのほか、国外旅費にも使うことができる。
3. 応募の方法 所定の研究助成申請用紙に必要事項を記入して、当公益信託に直接申し込む。
申込〆切：平成4年7月31日（金）必着。

応募についての問い合わせ及び研究助成申請用紙請求先：

公益信託・成茂動物科学振興基金

〒100 東京都千代田区丸の内1-4-5

三菱信託銀行本店営業部法人相談室

電話（03）3213-1211 内線 4052

第3回加藤淑裕記念賞候補者募集要項

1. 趣旨：

永年日本における発生生物学の発展に尽くし、1988年に逝去された加藤淑裕博士を記念するために設けられた賞であり、発生生物学の分野において優れた独創的研究を行なっている35歳以下の研究者（応募締切日における年齢とする）に対して加藤淑裕記念賞を贈呈するものである。候補者の国籍は問わないが、日本国籍以外の場合は日本での研究の経験があるか、または日本人と共同研究をした研究者を賞の対象とする。

2. 褒賞金：

受賞者に賞状ならびに副賞（総額50万円）を贈呈する。受賞件数は2件以内とし、複数の時は賞金を受賞件数で除した額を副賞として受賞者に贈呈する。

3. 応募方法：

応募は所定の用紙に必要事項を記入し、コピー3部および関連研究業績別刷各1部を添え加藤淑裕記念事業団に提出する。

4. 応募締切日：

1992年9月30日とする。

5. 選考の方法：

選考委員会（岡田節人委員長）において選考する。

6. 選考結果および賞の贈呈：

1992年11月15日までに受賞者宛に通知する。

〔連絡および送付先〕

三菱化成生命科学研究所内 加藤淑裕記念事業団

〒194 町田市南大谷11 TEL (0427) 24-6244

尚、第2回加藤淑裕記念賞は、岡崎国立共同研究機構生理学研究所生体情報研究系液性情報研究部門の永渕昭良氏の「接着分子カドヘリンの機能とその調節機構」に贈られることに決定いたしました。日本発生生物学会および大会準備委員会のご協力の下に、永渕氏には本年5月の第25回大会において記念講演をお願いする予定です。

東レ科学技術振興財団

I. 東レ科学技術賞（概要）

1. 候補者の対象……貴学協会に関する分野で、下記に該当するもの

- (1) 学術上の業績が顕著なもの
- (2) 学術上重要な発見をしたもの
- (3) 重要な発明をして、その効果が大きいもの
- (4) 技術上重要な問題を解決して、技術の進歩に大きく貢献したもの

2. 科学技術賞……2件前後。1件につき、賞状、金メダルおよび

賞金 500万円

3. 候補者推薦件数……1学協会から2件以内

4. 推薦締切期日……平成4年10月11日（日）弊会必着

（学会へは8月31日まで）

II. 東レ科学技術研究助成（概要）

1. 候補者の対象……貴学協会に関する分野で基礎的な研究に従事し、その研究の成果が科学技術の進歩、発展に貢献するところが大きいと考えられる独創的、萌芽的研究を活発に行っている若手研究者、またはそのグループ。冒險的な研究も対象とする。

2. 研究助成金……総額1億円前後、10件程度。1件当りの金額はとくに定めず、必要と認められる場合には最大3,000万円程度まで助成する。

3. 候補者推薦件数……1学協会から2件以内

4. 推薦締切期日……平成4年10月11日（日）弊会必着

（学会へは8月31日まで）

*問い合わせは学会事務局まで。

1992年地球化学研究協会学術賞「三宅賞」の受賞候補者

および研究助成候補者の公募

地球化学研究協会

三宅泰雄教授退官記念事業として設立された(1972)地球化学研究協会は、その翌年から、地球化学に顕著な業績をおさめた科学者に、毎年、地球化学研究協会学術賞「三宅賞」を贈呈しています。

さらに1983年からは、海外シンポジウム等に出席し、論文を発表する地球化学の若手研究者に対し、助成を行なっています。

なお、賞金および助成金は本協会を母体として、1983年に新設された公益信託「地球化学研究基金」(受託者 東洋信託銀行株式会社)から贈られます。

つきましては、下記の要領により、受賞候補者および研究助成候補者を公募します。なお、最近3年間の三宅賞受賞者および昨年の研究助成受領者は次の通りです。

三宅賞

- | | |
|------------|--|
| 第17回(1989) | 東京大学教授 脇田 宏 博士
「地球化学的手法による地震予知の研究」 |
| 第18回(1990) | 東京都立大学教授 石渡 良志 博士
「堆積物中の不溶性有機物の地球化学的研究」 |
| 第19回(1991) | 岡山大学教授 日下部 実 博士
「火山噴出物の同位体地球化学—アフリカ・カメルーン共和国・ニオス湖のガス災害」 |

研究助成

- | | |
|-----------|---|
| 第7回(1990) | 秋田大学医学部 久松 俊一
放射化学分析の方法と応用の国際会議Ⅱ 1991年4月29日～5月3日
(アメリカ ハワイ) |
|-----------|---|

記

三宅賞

1. 本賞は地球化学に顕著な研究業績をおさめた科学者に贈呈します。
2. 本賞は賞状とし、副賞として賞牌および賞金(30万円)をそえます。
3. 本賞の贈呈は、1年1件(1名)とします。
4. 規定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由(400字程度)主な論文10編程度に略歴をそえて、協会事務所までお送り下さい。

研究助成

1. 研究助成は地球化学の研究者で、海外のシンポジウム等に出席し論文を発表する者、ならびに海外における学術調査研究などに参加する者に対して行なわれます。
2. 助成金は1件10万円とし、年に3件とします。
3. 規定の用紙に推薦候補者（各締切日において満40歳迄とする）のシンポジウム出席については略歴、研究業績、国際会議名（主催団体、開催場所、開催年月日）論文題目、推薦理由等を、海外学術調査に関しては、略歴、研究業績、調査地（国名、地域名）、調査目的・計画、推薦理由、同行者などを記入して、協会事務所までお送りください。

三宅賞の贈呈および研究助成者の発表は、1992年12月5日（土）、東京で行ないます。

申込締切日は、三宅賞は、1992年8月31日（月）、研究助成は、第1回締切1992年8月31日（月）、第2回締切 1993年1月末日。

地球化学研究協会

〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217

電話 03-3330-2455（FAX 兼用）

第15期活動計画決まる

平成3年11月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、このたび開催した第113回総会において、第15期活動計画と新しい特別委員会の設置を決定しましたので、その概要をお知らせいたします。

日本学術会議総会における内閣官房長官挨拶

平成3年10月23日(水) 日本学術会議講堂

日本学術会議第113回総会に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

御承知の通り、日本学術会議は、我が国の科学者の内外に対する代表機関として、科学の向上発展を図り、行政、産業及び国民生活に科学を反映浸透させるという重大な責務を負っております。

21世紀に向けて、さらに調和のとれた真に豊かな国民生活を実現するためには、創造性豊かな科学技術は申すまでもなく、学術全般を一層発展させることが必要であります。また、我が国の国際的地位の向上に伴い、全地球的視点に立った我が国の国際的な貢献が強く求められております。

そこで、日本学術会術の皆様におかれましては、日本の科学研究の一層の進展のために、長期的かつ高い観点から議論を重ねていただくとともに、科学研究の分野において我が国がどのような国際的貢献をなすべきか等自然科学のみならず、人文・社会科学も含めた全学問的領域から総合的に検討していただき、建設的な御意見を積極的に出しいただきたく、お諮りをいたします。

頂戴いたしました有意義な御意見につきましては、その実現に最大限の努力をいたしたいと考えております。

終わりに、日本学術会議の今後の御発展と、御出席の皆様方の御健勝を祈念いたしまして、私の挨拶といたします。

日本学術会議第113回総会報告

日本学術会議第113回総会(第15期・第2回)は、10月23日～25日の3日間開催された。

総会冒頭、官房長官の挨拶があった。(上掲)

近藤会長からの前回総会以降の経過報告に続いて、運営審議会附置委員会、部会、常置委員会、国際対応委員会の各委員長、部長からの報告があった。そして第15期日本学術会議の活動方針となる「第15期活動計画(申合わせ)」と「臨時(特別)委員会の設置について(申合わせ)」(別掲)の2件の提案があり、真剣な討議の後、一部修正をして、圧倒的多数の会員の賛成により可決した。この2件の提案内容は、前回の臨時総会で設置された第15期活動計画委員会

が審議を重ねて作成したものであり、またその間に2回の連合部会及び部会を開いて、各会員の意見を集約したものである。

総会2日目は、予定を急遽変更してSSC(超電導超大型粒子加速器)計画についての討議を行った。これは去る10月15日に運営審議会のメンバーに対し、米大統領補佐官D・アレン・ブロムリー博士が、SSC建設計画に関して日本の協力を求めるスピーチを行ったのに対して、第4部から総会討議資料が提出されたためである。中岬卓雄第4部長と伊達宗行会員が登壇し説明を行い質問等に答えた後討議に入った。午後熱心な討議は続き政府に対して要望を提出することが採択された。

内閣官房長官挨拶の中で諮られた学術に関する国際対応については、第15期活動計画の中にも提唱されているが学術会議としては、今後、重要案件として審議することとした。

このほか、広報委員会、将来計画委員会も開催された。

総会3日目は、各常置委員会、各特別委員会(第1回会議)が開催された。

第15期活動計画

日本学術会議は、創設以来、科学者や学術研究団体との連携の下に、その目的・職務の遂行に努力し、我が国の学術研究体制の整備についての重要な勧告等を行い、研究所の設立などを含めて数々の業績を挙げてきた。また、数多くの国際学術団体との連携・協力、国際学術協力活動への参加など世界の学界と提携しつつ学術の進展に貢献してきた。しかしながら、創設後40有余年を迎えた現在、学術を取り巻く状況は、国際的にも国内的にも著しい変化を生じた。このような状況を踏まえて、第15期日本学術会議は、本会議の創設以来の基本的精神を引き続き堅持しながら、変動の激しい内外情報に対応して、なお一層の成果を挙げべく努力する。

日本学術会議は、学術に関する重要事項を自主的に審議し、我が国の学術研究の在り方についての方策を立案し、学術研究の成果を行政、産業及び国民生活に反映浸透させることを使命としている。このため、会員の科学的知見を結集し、時代の要請に即応しつつ将来を見通し、以下の視

点から学術研究の一層の推進を図る。

人文・社会及び自然科学を網羅した日本学術会議は、学問的視野に立ち、学術研究団体を基盤とする科学者の代表機関であることを認識して、全科学者の参加と意見の集約を図らなければならない。さらに、本会議が集約した科学者の意見を速やかに政策の形成に反映させるようにすべきである。特に学術政策については、他の関係諸機関との連携を強化し、その実現を図る。

また、学術研究団体を基盤とする日本学術会議は、関係ある学術研究団体等から推薦された科学者を中心として構成される研究連絡委員会の重要性を認識し、その活動を強化するとともに、学術研究団体との連絡を密にし、研究基盤の強化を図り、高度化する学術の発展に貢献する。

我が国の科学者を内外に代表する機関である日本学術会議は、国際社会における我が国の地位の向上に照らし、海外諸国の期待と時代の要請にこたえて、学術の分野における国際貢献に積極的な役割を果たすべきである。

日本学術会議は、真理探究という基本理念に立脚し、国民とともに学術の在り方を考え、同時に学術の国際性を重視するものである。そのためには、学術の健全な発展に向けて、学問・思想の自由の尊重と研究の創意への十分な配慮の下に、長期的かつ大局的な視点に立ち、創造性豊かな研究の推進に努める。

科学が文化国家の基礎であるという確信に立ち、日本学術会議は、科学者の総意を代表してその精神を高揚したい。即ち、21世紀に向けて学術体制及び研究・開発の望ましい在り方を抜本的に検討し、我が国の学術政策に指針を与えることにより、国民の期待にこたえとともに、人類の福祉と世界の平和に貢献することを期するものである。

1. 重点目標

第15期活動計画の重点目標は、次のとおりとする。

(1) 人類の福祉・平和・地球環境の重視

今世紀において、科学・技術は長足の進歩を遂げたが、一方において、地球環境の悪化を始めとして、人類の将来を脅かすような事態が起こっている。さらに現在の世界は、激動の渦中にあり、その影響は、学術の分野にも及んでいる。

今日の社会的現実が提起している問題を解決するには、直接に関係する研究だけでなく、広く諸科学が積極的に関与する必要がある。そのためには、多くの研究領域が、それぞれ独自に一層の深化を図るとともに、共同の努力を行い、研究の内容、学問体系の変革にまで進むべきである。人文・社会及び自然科学を包含する日本学術会議は、その特徴を生かして十分な審議を行い、人類の福祉・平和・地球環境を重視して、学術研究の進むべき方向を提示する。

(2) 基礎研究の推進

学術の研究は、人類の発展に不可欠であることは言をまたない。日本学術会議は、将来の学術の発展に向けて、各分野の基礎研究の推進に積極的に取り組むこととする。

また、学術の領域は広範多岐であり、基礎研究であれ応用研究であれ、それぞれの領域ごとに方法論も異なり、研究者の求めるものに大きな違いがあることを十分に考慮し、各分野の研究者の声を聞き、それぞれに適した育成策を講ずる必要がある。それと同時に、学術研究の動向に注目し、いわゆる学際的研究や学問の総合化に留意しつつ、諸科学の調和のとれた発展を目指すことが重要である。

以上のため、第13期においては学術研究動向、第14期においては学術研究環境に関する調査研究を行い、我が国の学術水準の国際比較やその発展を阻害する諸因子な

どを指摘した。今期においては、これらの調査結果を参考にしつつ、創造性の基礎となる個人の着想を重視し、かつ、国際的にみた学術研究の動向を見極め、独創的研究の強化策等を積極的に図る。さらに、国民生活の向上発展に資する学術の具体的方策を審議提言する。

(3) 学術研究の国際貢献の重視

学術研究は、本来、真理の探究を目指す知的活動であり、その成果は広く人類共通の資産として共有されるべきものである。したがって、学術の国際交流は、学術研究にとって本質的に重要であり、その在り方に常に関心を払う必要があることは言うまでもない。

さらに近年は、国際平和の推進や環境問題の解決等、いわゆる地球的あるいは国際的規模の課題について、我が国の研究を充実させつつ、広く世界の諸科学の発展を積極的に推進する必要が増大している。また、発展途上国及び近隣諸国の学術振興のため、これら諸国の研究者に協力して、貢献策を立案することが強く要望されている。これらのことから、我が国の科学者が今後積極的に国際貢献に取り組み、学術を人類の繁栄と世界の平和に役立てるため積極的な役割を果たすことが必要となりつつある。

以上のような状況から、本会議が築いてきた国際学術交流・協力の在り方についての諸原則と実績を基盤として、学術の国際交流・協力の飛躍的な拡充強化を図り、国際的寄与を格段に拡大することが極めて重要である。

2. 具体的課題（要旨）

次の課題を選定した。

- (1) 科学者の倫理と社会的責任
- (2) 学術研究の長期的展望
- (3) 研究基盤の強化と研究の活性化
- (4) 研究者の養成
- (5) 学術情報・資料の整備
- (6) 学術研究の国際交流・協力
- (7) 国際対応への積極的取り組み
- (8) 文化としての学術
- (9) 平和と安全
- (10) 死と医療
- (11) 生命科学と社会的諸問題
- (12) 人口・食糧・土地利用
- (13) 資源・エネルギーと地球環境
- (14) 巨大システムと人間

3. 具体的課題への対処及び臨時（特別）委員会設置について（省略）

注：国際対応委員会の扱いは常置委員会の並びとする

◇今回の総会決定により設置された特別委員会◇

- ・文化としての学術
- ・平和と安全
- ・死と医療
- ・生命科学と社会的諸問題
- ・人口・食糧・土地利用
- ・資源・エネルギーと地球環境
- ・巨大システムと人間

御意見・お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会 電話03(3403)6291

第15期特別委員会の活動始まる

平成4年3月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議では、昨年10月の総会において設置された第15期の各特別委員会が活動を始めましたが、今回の日本学術会議だよりでは、これらの特別委員会に加えて、日本学術会議主催 IGBP シンポジウム等についてお知らせいたします。

第15期の特別委員会

昨年10月の第113回総会で決定された、日本学術会議の第15期活動計画では、活動の重点目標として、①人類の福祉・平和・地球環境の重視、②基礎研究の重視、③学術研究の国際貢献の重視、の3本の柱を掲げるとともに、これらの重点目標を踏まえて、多方面の科学者によって構成される日本学術会議にふさわしく各分野にわたって広く対応し、かつ第15期中に適切な形で報告・提言に取りまとめるべき具体的課題として14の課題を選定している。

具体的課題のうち、今期中に一応の結論を出すことが望ましい臨時的な7つの課題については、それぞれ特別委員会を設置し、審議を開始した。

各特別委員会の名称及び任務等は次のとおりである。

◆文化としての学術

委員長：宅間 宏（第4部会員）

（任務）学術は、人類発展の基礎である。学術研究の意義についての社会的認識を深めるため、文化としての学術の在り方を検討する。

◆平和と安全

委員長：香西 茂（第2部会員）

（任務）平和と安全の確保や国際摩擦の解消等に関する研究推進の在り方及び研究体制等について検討する。

◆死と医療

委員長：小坂二度見（第7部会員）

（任務）医療技術の急速な進展は、自然科学の分野だけでなく、人文・社会科学の領域にも種々の問題を提起している。終末医療における尊厳死、安楽死や医療経済の問題、さらに説明と同意などの社会的側面等人の死と医療の在り方について検討する。

◆生命科学と社会的諸問題

委員長：山科郁男（第7部会員）

（任務）生命科学とその応用の急速な進展に伴い、倫理的、社会的諸問題並びに規制の在り方等について検討する。その際、我が国における生命科学の研究体制の在り方にも留意する。

◆人口・食糧・土地利用

委員長：梶井 功（第6部会員）

（任務）世界人口の増加や地球環境変化による食糧需給の不安定化問題と、これらに伴う土地利用変化の諸影響等を総合的に検討して、人間活動の在り方を探る。また、一極集中の激しい我が国の現状を勘案し、今後の国土利用の在り方についても検討する。

◆資源・エネルギーと地球環境

委員長：吉野正敏（第4部会員）

（任務）資源・エネルギーの開発と利用に伴う自然及び人間社会への影響を研究し、「持続可能な発展」のための諸方策と環境教育の在り方等について検討する。

◆巨大システムと人間

委員長：内山喜久雄（第1部会員）

（任務）技術革新・システムの巨大化が人間に及ぼす影響について、安全性確保と人間性尊重の立場から検討する。

これらの各特別委員会は、発足以来現在までに各々2～3回の会議を開催して、それぞれの任務に添った具体的な審議課題や今後の審議計画等について熱心に審議を進めている。今後の審議の成果が大いに期待されているところであり、今後、審議成果が発表され次第紹介していく予定である。

公開講演会の開催状況

第15期に入って、初めて開催された日本学術会議主催公開講演会は、「文明の選択—都市と農業・農村の共存を目指して—」と題して、平成4年1月27日(月)13時30分～16時30分に、福岡明治生命ホール(福岡市)で開催され、水間会員(第6部)、北村会員(第6部)及び利谷会員(第2部)の講演が行われ、多数の聴講者があった。

つづいて、「子どもの人権を考える」と題して、平成4年3月7日(土)13時30分～16時30分に、日本学術会議講堂で開催され、堀尾会員(第1部)、永井会員(第2部)及び馬場会員(第7部)の講演の後、熱心な質問が続出した。

地球圏—生物圏国際協同研究計画(IGBP)シンポジウム

日本学術会議主催の地球圏—生物圏国際協同研究計画(IGBP)シンポジウム「日本のIGBP研究の現状と将来」が去る2月4日(火)、5日(水)の両日、日本学術会議を会場として開催された。

日本学術会議においては、平成2年4月の総会において、「地球圏—生物圏国際協同研究計画(IGBP)の実施について(勧告)」を採択し、政府に対し研究の積極的な推進を求めたところであるが、IGBPについて国内の各研究者、研究機関において実施される研究の促進を図るとも

に、この研究が極めて多くの分野にわたり、また多数の研究機関が関与していることから、この研究の連絡、調整を図る場として、本シンポジウムを開催することとしたものである。また、我が国のIGBPの研究が、広義のモンスーン・アジア地域、西太平洋地域、極域を中心に行われることから、これらの地域の研究者を招きそれぞれの国の研究の状況の紹介、意見交換を行った。

本シンポジウムの内容は次のとおりである。

〔1日目〕

講演 IGBPについて

第1領域～大気微量成分の変動と生物圏

- (1) 地球大気化学国際協同研究計画 (IGAC)
- (2) IGACの東アジアにおける展開 (APARE)

第2領域～海洋における炭素循環

- (3) 海洋における炭素循環

第3領域～地球変化に係わる生態系及び水循環

- (4) 炭酸ガス変動が炭素循環に及ぼす影響
- (5) 水循環と生態系 (BAHC)

第4領域～地球圏-生物圏の相互作用を考慮したモデリング

- (6) 気候モデルおよび大気化学モデル
- (7) 局地気候・環境モデリングの立場から
- (8) 生態系モデリングの立場から

第5領域～IGBPにおける地球観測衛星の整合性と問題点

- (9) 気象衛星データの現状と将来
- (10) 地球観測衛星データの現状と将来
- (11) NASA EOS と ASTER

第6領域～古環境変化の原因と応答

- (12) PAGESについて
- (13) 南極氷床ドーム深層掘削観測計画
- (14) 温暖化と沿岸環境

第7領域～農林水産活動の地球環境への影響

- (15) 農業生態系に関する地球環境研究-メタンと温暖化-
- (16) 森林・林業に関する地球環境研究-炭素収支と温暖化の抑制-

〔2日目〕

特別講演～ナショナルプロジェクト紹介～

オーストラリア、中国、フィリピン、タイ及び日本

領域別個別討議

第1領域から第7領域まで

各領域からの報告

総合討議

当日は2日間にわたるシンポジウムであったが300人を超える参加者があり、盛況のうちに終了した。

本シンポジウムの成果は、報告書として取りまとめ、今後の研究の参考資料として関係機関・研究者等に配布することとしている。

なお、平成4年度にも引き続き本シンポジウムを開催する予定である。

二国間学術交流事業

日本学術会議では、二国間学術交流事業として毎年代表団を海外に派遣し、訪問国の科学者等と学術上の諸問題について意見交換を行って、相互理解の促進を図る事業を行っている。

この事業は、昭和58年度から実施されており、これまでにアメリカ合衆国、連合王国、オーストラリア、中華人民共和国等19か国に代表団を派遣してきた。

平成3年度は、11月4日から14日までの11日間の日程で、ベルギー王国及びオーストリア共和国へ、川田侃副会長を団長とする計10名（うち随行事務官2名）から成る代表団を派遣した。

ベルギー王国では、科学技術担当省、科学、文学及び芸術に関する王立アカデミー、ブリュッセル自由大学、EC本部教育関係機関、EC本部環境総局などを、また、オーストリア共和国では、科学研究省、オーストリア科学アカデミー、ウィーン大学、ドナウ河畔の国連都市にある国際原子力機関 (IAEA)、国連工業開発機関 (UNIDO) などを訪問した。

各訪問先では、関係者との間で、それぞれの国の学術研究体制や科学技術政策などをめぐって活発な意見交換が行われた。

特に印象的だったものとして、まずベルギー王国では、ECが推進しているERASMUS計画、これはEC Action Scheme for the Mobility of University Studentsの略で、EC12か国の大学生を域内各国へ相互留学させて、専門科目や語学の能力向上あるいは風俗習慣の理解をはかろうとするもので、ECの将来に大きく貢献するものと思われる。また、ベルギー王国は、長い歴史の流れの中で、フランス語とオランダ語の2か国語が話されてきたため、この言語間の対立が、政治・経済の発展はもとより、学問の分野にも非常に複雑な影響を与えていることであった。今回訪問した科学、文学及び芸術に関する王立アカデミーやブリュッセル自由大学もまったく同名のアカデミーと大学がフランス語系 (ワロン系) とオランダ語系 (フラマン系) とに分かれて存在しており、我々の代表団も、団編成を2班に分けてこれらの機関を訪問することになったことは、非常に印象的であった。

オーストリア共和国では、650年の伝統をほこるウィーン大学やオーストリア科学アカデミーの建物の重厚さに目を見はり、またドナウ河畔に作られた国連都市にIAEAとUNIDOの2つの国連機関を訪問した際には、IAEAのチェルノブイリ原発事故以後の核問題への積極的な取り組みやUNIDOの開発途上諸国における工業発展に対する貢献度の大きさに団員一同大いに感激するとともに、D. L. Siason Jr. UNIDO事務局長の流暢な日本語には、だれもがびっくりさせられた。

近年、学術、特に基礎研究における我が国の国際貢献の重要さがウェイトを増す中で、この種の学術交流事業は益々強化されるべきものであることを、派遣代表団員全員が強く認識させられた今回の渡欧であった。

御意見・お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会 電話03(3403)6291

会 員 異 動

(1991年10月～1992年1月)

<新入会員>

(氏 名)	(所 属)	(住 所)	(①テーマ, ②材料)
⑩平尾 雄二	神戸大・自然科学研究 科・資源生物科学	〒657 神戸市灘区六甲台町 1-1	①マウス卵母細胞の成熟 機構 ②マウス
⑩藤森 一浩	大阪大・基礎工学・生 物工学・葛西研究室	〒560 豊中市待兼山町1-1	①脊椎動物の体軸形成 ②ニワトリ
海野くに子	常葉学園大・教育	〒420 静岡市瀬名1000	①形態形成, 体軸の決定 ②メダカ
高橋 直	名古屋大・アイソトー プ総合センター	〒464-01名古屋市千種区不老町	①神経誘導の分子機構 ②イモリ, アフリカツメ ガエル
森島 正恵	東京女子医大附属日本 心臓血圧研	〒162 新宿区河田町8-1	①心大血管系の発生 ②マウス, ラット
⑩福田 公子	東大・理・生物・動物 第二	〒113 文京区本郷7-3-1	①消化管発生の分子機構 ②ニワトリ
⑩見学美根子	東大・医・脳研・神経 生物学	〒113 文京区本郷7-3-1	①神経誘導の機構 ②アフリカツメガエル
富永 明	熊大・医・免疫生物	〒860 熊本市本荘2-2-1	①免疫生物学 ②マウス
永田 三郎	東京都老人総合研究所	〒173 板橋区栄町35-2	①下垂体ホルモン産生細 胞の分化 ②ラット
宮野 隆	神戸大・農・家畜繁殖 学	〒657 神戸市灘区六甲台町 1-1	①細胞周期 ②ブタ, マウス
大原 睦生	北海道立滝川畜産試験 場	〒073 滝川市東滝川735	①胚の操作 ②ニワトリ
中山 一郎	水産庁養殖研究所	〒519-04三重県度会郡玉城町 昼田224-1	①性決定, 分化 ②硬骨魚類
⑩石川 仁	山形大・医・衛生学教 室	〒990-23山形市飯田西2-2-2	①初期胚の発生 ②マウス

④池松 真也 鹿児島大・医・生化学 〒890 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1 ①糖転移酵素
第二講座

④清本 正人 岡山大・理・附属臨海 〒701-43岡山県邑久郡牛窓町 ①卵の極性
実験所 鹿忍130-17 ②イトマキヒトデ

<住所, 変更>

(氏 名)	(所 層)	(住 所)
及川 胤昭	④機能性ペプチド研究所	〒990 山形市南三番町11-26
藤巻 秀和	国立環境研究所環境健康部	〒305 つくば市小野川16-2
西田 宏記	東工大・生命理工・生命理学	〒227 横浜市緑区長津田町4259
中辻 憲夫	国立遺伝研・遺伝実験生物保存 研究センター	〒411 三島市谷田1111
館 鄰	東大・農学系研究科応用動物科学	〒113 文京区弥生1-1-1
成瀬 一郎	愛知県コロニー発達障害研究所	〒480-03春日井市神屋町713-8
浜島 紀之	愛知県がんセンター生物学部門	〒464 名古屋市千種区田代町鹿子殿
道端 斉	広島大・理・向島臨海実験所	〒722 広島県御調郡向島町千汐
吉里 勝利	広島大・理・動物・形態学講座	〒724 東広島市鏡山1-3-1
赤坂 甲治	広島大・理・動物	〒724 東広島市鏡山1-3-1
木下 勉	広島大・理・動物・形態学講座	〒724 東広島市鏡山1-3-1
嶋田 拓	広島大・理・動物・分子遺伝学	〒724 東広島市鏡山1-3-1
山田 一実	広島大・理・動物・分子遺伝学	〒724 東広島市鏡山1-3-1
高橋 純夫	広島大・理・動物	〒724 東広島市鏡山1-3-1
平田たつみ	京都府立医科大学第二解剖学	〒602 京都市上京区河原町通広小路上ル 梶井町465
④永淵 昭良	岡崎国立共同研究機構生理学研・ 生体情報	〒444 岡崎市明大寺町西郷中38
④井筒 ゆみ	広島大・理・動物・形態学講座	〒724 東広島市鏡山1-3-1
④山本 卓	広島大・理・動物	〒724 東広島市鏡山1-3-1
三木 清史	名古屋大・農・生化学制御研究施設	〒464 名古屋市千種区不老町
福澤 利彦	慶應義塾大学生物学教室	〒223 横浜市港北区日吉4-1-1
藤井 孝朗	萬有製薬④研究開発本部	〒103 中央区日本橋本町2-2-3
春海 隆	農水省・畜産試験場育種部遺伝子 機能研究室	〒305 つくば市竹園3-5-301-508 (自宅)
広瀬 裕一	慶應義塾大学生物学教室	〒223 横浜市港北区日吉4-1-1

<退 会>

四方田 淳, 大山みちえ, 手代木 渉, 正木 茂夫, 山内 英男, 八木橋元一, 高岡 実
土田 一人, 細田 永子, 三浦 正幸, 萩原 康子

〔賛助会員〕

- | | | |
|---------------------------|-------|---|
| 組織培養はパイレックス・コーニングの岩城硝子㈱ | 〒 100 | 千代田区丸の内3-2-3
TEL 03-3214-6221 |
| 生物学・生態学洋書のことならグリーン洋書㈱ | 〒 210 | 川崎市幸区塚越2-260
TEL 044-533-0470 |
| 試薬・機器の御用命は名古屋片山化学㈱まで | 〒 460 | 名古屋市中区丸の内3-11-14
TEL 052-971-6531 |
| 日製産業株式会社 | 〒 453 | 名古屋市中村区名駅4-6-18
(名古屋ビル内)
TEL 052-583-5846 |
| バイオテクノロジーで未来をひらく㈱バイオ科学研究所 | 〒 990 | 山形市城西町5-34-5
TEL 0236-44-5030 |
| 発生学をはじめとする生物科学書の出版社・培風館 | 〒 102 | 千代田区九段南4-3-12
TEL 03-3262-5256 |
| 藤本理化 | 〒 113 | 文京区向ヶ丘2-34-12
TEL 03-3827-8151 |
| 三菱化成生命科学研究所 | 〒 194 | 町田市南大谷11
TEL 0427-24-6226 |
| マウス・モノクローナル抗体（アロ抗体）は明治乳業㈱ | 〒 104 | 中央区京橋2-3-6
TEL 03-3271-4333 |
| 試薬及び理化学機器販売の理科研㈱ | 〒 463 | 名古屋市守山区元郷2-107
TEL 052-798-6151 |
| 科学の技術に奉仕する理工学社 | 〒 113 | 文京区本駒込5-9-10
TEL 03-3928-5211 |
| 次代を担うバイオテクノロジー和研薬㈱ | 〒 606 | 京都市左京区北白川西伊織町25
TEL 075-721-0491 |

(50音順)

広告掲載のお願い

日本発生生物学会は理学，医学，薬学，農学をはじめ分子生物学，細胞生物学，遺伝学など，さまざまな生物学分野で発生生物学の基礎研究に興味を持つ内外の研究者によって組織されている学会であり，国内外に約 900 人の会員を持っております。

英文学術雑誌 Development, Growth and Differentiation は，日本発生生物学会の機関誌で年 6 回発行し，国内に約 1,000 部，国外に約 600 部配布致しております。また会員にはインフォメーション・サーキュラーを年 3 回配布致しております。

目下，本学会では広告主を募っております。会員各位におかれましても広告主のご紹介等，是非ご協力頂きますようお願い致します。

広 告 料			
DGD 本誌	1 頁	年 6 回	150,000 円
	半 頁	〃	78,000 円
インフォメーション・	1 頁	年 3 回	30,000 円
サーキュラー	半 頁	〃	15,000 円

申し込み先：日本発生生物学会

〒 113 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学理学部動物学教室内

.....切.....り.....取.....り.....線.....

広告申し込み書

年 月 日

日本発生生物学会 御中

広告の掲載をお願いしたく下記の通り申し込みます。

☐ DGD 本誌	1 頁
☐ 〃	半頁
☐ サーキュラー	1 頁
☐ 〃	半頁
住 所	
会 社 名	
担当者名 電話番号	

賛助会員へのご入会のお願い

日本発生生物学会

会長 江口 吾朗

近年、ライフサイエンス、バイオテクノロジー等の言葉が広く語られ、生物学に大きな関心と注目が払われるようになってまいりました。

日本発生生物学会は、発生生物学の進歩と普及をはかるため設立された学会で、日本を主に、外国の発生学者を混じえて約900名を結集しております。発生学は、言うまでもなく医学・農学等の諸分野とも深い関連を有しており、最近とみに進展の著しい遺伝情報発現をめぐる諸問題、癌細胞の基礎的研究、老化の問題等も発生生物学者の大きな関心の的になっております。日本発生生物学会は、これらの分野での活発な研究者を会員としております。又、本学会の刊行致しております欧文誌“Development, Growth and Differentiation”(DGD)もこの方面の国際的学術雑誌として高く評価されております。

貴社におかれましては、このような学問の重要性をすでに御承知のことと存じます。何卒、本学会趣旨に御賛同の上、賛助会員として本会を御支援賜りますよう御願い申し上げます。

なお、賛助会員は年3回発行される「インフォメーション・サーキュラー」誌上に特記され、本会の刊行する欧・和文刊行物(会員名簿を含む)が配布されます。会費は、一口三万円を申し受けております。御入会の際は、入会申込書を事務局までお送り下さい。

連絡先：日本発生生物学会事務局

〒113 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学理学部動物学教室内

.....切.....り.....取.....り.....線.....

日本発生生物学会賛助会員入会申込書

年 月 日

賛助会員として入会の申し込みを致します。

(_____ 口 _____ 円)

住 所

会 社 名

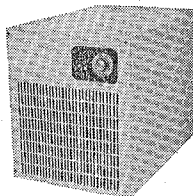
印

担当者名
電話番号

加熱冷却ユニット

クーラー・ヒーターはチタン製。淡水はもちろん海水や薬品液にも使用できる高性能の循環式小型加熱冷却装置です。

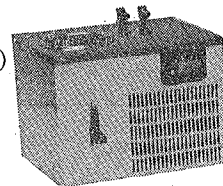
形式	クーラー	ヒーター	概略水量	価格
HC061A-3	65W	300W	120ℓ	¥213,000
HC101A-3	100W	300W	160ℓ	¥225,000
HC131A-5	130W	500W	260ℓ	¥239,000
HC201A-5	200W	500W	360ℓ	¥258,000
HC301A-5	300W	500W	670ℓ	¥321,000
HC401A-5	400W	500W	1000ℓ	¥360,000



低温恒温循環水槽

実験台上でも使用できるように極めてコンパクトにまとめた低温恒温循環水槽です。水温は低温から高温までを任意に設定することができます。外部循環機能をそなえておりますので恒温水槽のほか、カラムの冷却、保温など幅広い用途があります。

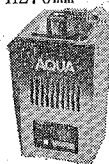
形式:CT 65-300-S
使用温度範囲:0~50℃(±0.1℃)
外形寸法:W420×D330×H340mm
槽内寸法:φ153×H187mm
冷凍機:65W ヒーター:300W
価格:¥250,000



超小型ウォーターバス式インキュベーター

極めてコンパクトにまとめた超小型の恒温槽です。50ml程度のピーカーや小型の試験管数本の恒温を得る用途に適しています。

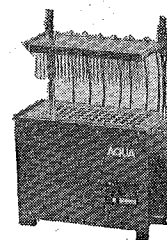
形式:CTH-100(加熱専用型)/CTC-100(加熱冷却型)
外形寸法:146×176×h225mm/146×176×h270mm
温度範囲:室温+5~60℃/+5~60℃
温度精度:±0.05~±0.1℃
槽材質:ステンレス SUS304
槽内寸法:98×100×h59mm
本体価格:¥98,000/¥168,000



ゼットコンデンサー

空気または窒素ガスを試験管内に吹きつけ、溶媒の蒸発を促進し、濃縮時間を短縮する装置です。

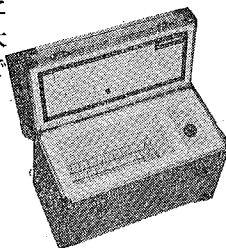
形式:JC 70-300
外形寸法:350×191×h540mm
槽内寸法:300×120×h70mm
温度範囲:室温~100℃±0.4deg
吹出ノズル本数:70本
ヒーター:300W
空気ポンプ:20W
電源:100V
価格:¥310,000



恒温コンテナ

蓄冷体の融解速度を微量にコントロールして恒温を保つ小型の恒温輸送用コンテナです。凍結したら困るあらゆる物体の低温での恒温輸送に威力を発揮します。商用電源、大型バッテリーを使用しないので可動性に富みどこでも使えます。

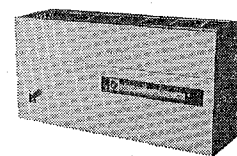
形式:CTC-422
外形寸法:407×193×H298mm
庫内寸法:246×122×H200mm
コントローラー:デジタル設定, デジタル表示
価格:¥88,900(蓄冷体-5℃付)



温度勾配装置(ウォーターバス)

温度調節水槽はそれぞれ独自の温度に設定できます。精度の高い恒温が得られます。温度の設定はデジタル式。振とう装置付きもあります。

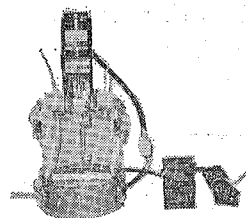
形式:TGW-3(三連)/TGW-5(五連)
使用温度範囲:0~50℃
温度調節精度:±0.05~±0.1℃
槽内寸法:150×260×150×3/×5
冷凍機:200W/300W
ヒーター:90W×3/×5
価格:¥788,000/¥970,000



本城式プランクトン濃縮装置

プランクトンを効率よく回収する装置です。プランクトン細胞の崩壊が少なく、低濃度で分布している種類を観察することができます。ろ過水はプランクトンの体液が混入しない純水なものが得られます。ろ紙の表面は目詰まりしにくく早い流速が得られます。

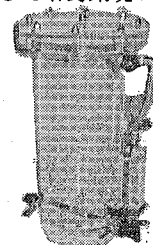
形式:PC15-S
回収率:80~95%
価格:¥98,000



加圧式インキュベーター

空気または不活性ガスで加圧した環境下で各種生物を培養する装置です。新鮮な空気を常に供給しながら一定圧を保つことができますので安定した培養環境が得られます。

形式:PI 203
最大使用圧力:2.5kg/cm²
内寸法:φ190×h440mm
外形寸法:φ280×h530mm
本体材質:透明アクリル
価格:¥198,000(加圧ポンプは別)
給水装置 減圧弁・安全弁付



生細胞の染色に

細胞蛍光標識キット

Cell Linker Technology に基づく細胞染色法で、細胞膜に高親和性を持つ新しいタイプの蛍光色素PKH2またはPKH26 蛍光色素と希釈液とを組み合わせた、細胞蛍光標識キットです。

細胞機能に影響しません

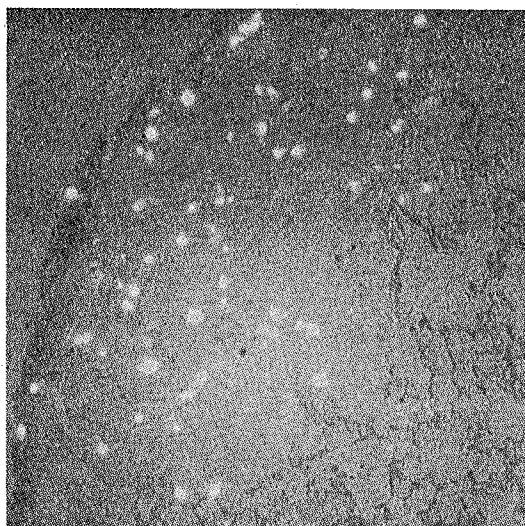
細胞と数分間混合するだけで、生細胞をその機能を損うことなく染色可能で、細胞の移動や増殖のモニタリングに大きな威力を発揮します。

簡便です

従来 ^{51}Cr 等を用いて行われていた LAK 細胞のモニタリングや NK 活性の測定が簡便に、しかも安全に行うことができます。

安定です

ウサギ赤血球を標識した場合、PKH26 では *in vivo* でその溶出の半減期が100日以上を示し、長期のモニタリングが可能です。



Tumor Localization of PKH26 Labeled TILs.

マウス肺癌組織に浸潤している、PKH26 で染色した IL-2 処理リンパ球が観察されます。

Photo Courtesy of
Drs. Per Basse & Ronald H. Goldfarb
Pittsburgh Cancer Institute, Pittsburgh, PA

発売元



大日本製薬株式会社
ラボラトリー プロダクツ部

〒564 大阪府吹田市江の木町33-94
TEL 大阪 (06) 386-2164 (代表)
東京 (03) 3828-6544 (代表)

マウスのテラトーマ

森脇和郎／序 野口武彦 村松 喬／編集

— EC細胞による哺乳動物の実験発生学 —

A 5 判・296 頁
定価 3914 円
(本体 3800 円)

テラトーマの生物学的な知識、EC細胞の種類と成立、EC細胞を用いた初期胚の細胞生物学・分子生物学的研究、EC細胞のキメラ動物への応用などについて、研究の進展を紹介し、その理論と実験技術を解説。医学・生物学・薬学など発生学、遺伝学に関心を持つ方がたの絶好の参考書です。

哺乳動物の初期発生

妹尾左知丸 加藤淑裕 入谷 明
鈴木秋悦 館 鄰／編集

— 基礎理論と実験法 —

B 5 判・480 頁
定価 15450 円
(本体 15000 円)

初期発生の基礎理論をはじめに説明し、ついで初期胚を研究対象とする主要な実験研究法を解説してあります。生命現象研究へ大きな手がかりとなる本書は、医学・生物学・農学・薬学を専攻する研究者の必携の書です。

体細胞遺伝学

山根 績 岡田善雄 堀川正克 黒木登志夫／編集

A 5 判・720 頁
定価 10094 円
(本体 9800 円)

H V J による細胞融合法、薬物や放射線、化学物質を用いた細胞の突然変異による研究、あるいは遺伝子組換え法を使った研究等体細胞遺伝学研究の最前線をまとめたモノグラフィー。医学・生物学・農学・薬学研究に絶好の参考書です。

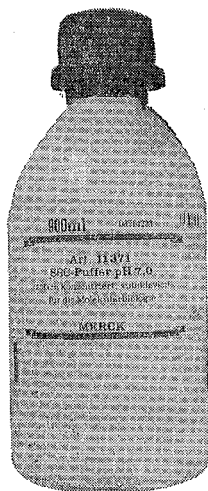
理工学社

〒113 東京都文京区本駒込5-9-10 振替東京1-34676 電話03(828)5211(代) <図書目録進呈>

KANTO
BIOCHEMICALS

MERCK

トランスファー& ハイブリダイゼーション用試薬



メルクではサザン、ノーザン・トランスファーとハイブリダイゼーションに用いる試薬を調製し、濃縮タイプまたは Ready-to-use タイプとして取り揃えました。

トランスファー用試薬

SSC 溶液 pH 7.0
20×濃縮液 900ml
オートクレーブ済
DNase、RNase 及び
protease フリー

ハイブリダイゼーション用試薬

デンハールト 溶液
50×濃縮液 10ml 調製用
凍結乾燥品

なお、上記以外の関連製品及び詳細につきましては下記までお問い合わせ下さい。



関東化学株式会社 試薬事業本部

103 東京都中央区日本橋本町3-2-8 03(3663)7631
541 大阪府中央区瓦町2丁目5番1号 06 (222)2796

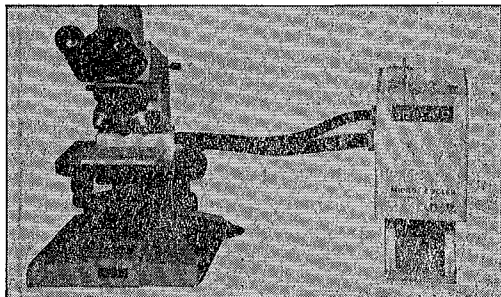
新発売

冷却タイプ

マイクロクーラー・プレート®

(顕微鏡用透明冷却板)

特許申請済



マイクロクーラー・プレートは、室温から -25°C (MC-100) の範囲で霜 (曇り) を防止した状態で設定した温度に自動制御します。電子冷却方式の為液体窒素が不要で、更に60mmシャーレあるいはスライドガラスがセットできる広い透明冷却面となっています。

機種	設定温度	精度	標準価格
MC-10	室温から 0°C	$\pm 0.5^{\circ}\text{C}$	58万円
MC-100	室温から -25°C	$\pm 1^{\circ}\text{C}$	128万円

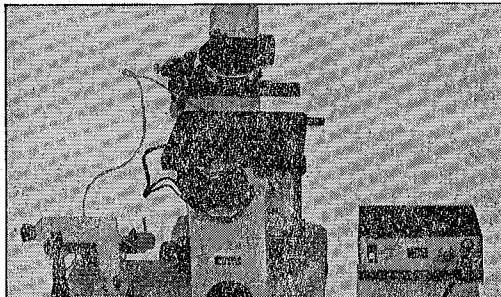
- 「冷却タイプ」「加温タイプ」のカタログのご購求は本社営業部へ。
- プレート形状、ガラス面への穴開け加工等御相談に応じます。

加温タイプ

マイクロウォーム・プレート®

(顕微鏡用透明加温板)

特許申請済



マイクロウォーム・プレートは、透明なガラス板の面全体が発熱体ですのでむらのない均一な表面温度を保ちます。(設定温度：室温 $\sim 50^{\circ}\text{C}$) 精密定温下での培養状態観察に、又、細胞組織の電位測定等に活用されています。用途により多機種取り揃えております。

株式会社 北里サプライ

本社営業部 静岡県富士宮市三壽平1429 〒418

TEL.(0544)27-8831 FAX.(0544)27-8060

東京出張所 TEL.(03)3903-7410

CORNING BETTER SURFACE PRODUCTS

コーティングの時間と
コンタミネーションの不安を解消

■ファイブロネクテンコート製品

コートNo.	規 格	培養面積	個/パック	個/外箱
25000FN	ディッシュ 35φ	9cm ²	10	60
25010FN	ディッシュ 60φ	21cm ²	10	40
25020FN	ディッシュ100φ	55cm ²	10	40

○ウシ血漿由来ファイブロネクテン

■コラーゲンコート製品

コートNo.	規 格	培養面積	個/パック	個/外箱
25000COL	ディッシュ 35φ	9cm ²	10	200
25010COL	ディッシュ 60φ	21cm ²	10	200
25020COL	ディッシュ100φ	55cm ²	10	120
25810COL	マイクロプレート6F	9.4cm ²	1	20
25820COL	マイクロプレート24F	2cm ²	1	20
25860COL	マイクロプレート96F	0.32cm ²	1	20
25100COL	フラスコ 25cm ²	25cm ²	10	60

○ブタ臍由来酸可溶化TypeIコラーゲン

■ゼラチンコート製品

コートNo.	規 格	培養面積	個/パック	個/外箱
25000GEL	ディッシュ 35φ	9cm ²	10	200
25010GEL	ディッシュ 60φ	21cm ²	10	200
25020GEL	ディッシュ100φ	55cm ²	10	120
25810GEL	マイクロプレート6F	9.4cm ²	1	20
25820GEL	マイクロプレート24F	2cm ²	1	20
25860GEL	マイクロプレート96F	0.32cm ²	1	20
25100GEL	フラスコ 25cm ²	25cm ²	10	60

○豚皮由来ゼラチン

※使用に先立ちサンプルによる事前チェックをおすすめします。35%ディッシュ・サンプルパックを用意しておりますのでご希望の方は本社又は下記支店へご連絡下さい。

岩城硝子株式会社

本社第3営業部 〒100 東京都千代田区丸の内3-2-3 ☎03(214)6221(直)
 ●大阪支店 ☎06(362)6291(代) ●名古屋支店 ☎052(211)3855(代)
 ●九州支店 ☎092(451)5606(代) ●広島支店 ☎082(248)0293(代)
 ●札幌営業所 ☎011(221)3477(代)